



2014

11

November

SUN MON TUE WED THU FRI SAT

26	27	28	29	30	31	1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	1	2	3	4	5	6

バリ。バリ。乾いた葉が音を立てる。

淡い黄金を纏い、仄かな紅蓮に燃える道。  
人々の眼に彩りを焼きつけ、大地へと還るそれ。  
過ぎ行く秋に満ちた森で、フレイが、弾む。

俺達の首には、愛妻手製の冬支度。

「似合ってるな」  
「レオンさんも、お似合い」  
「……最初、笑ってなかったか？」  
「大丈夫。私の溢れる愛情が諸々カバー」

生粋の男振りが益々上がってますよ。そう、褒める。

寄り添い、俺の巻く衣を整え、咲かせる破顔は子供のよう。  
半面、見上げる眼差しに宿る婀娜な色は、熟れ初めの桃のよう。  
丁度いい、という風に、垂れたマフラーをフレイに引かれる。

編み目に柔らかく潜る指を、俺も掴み、接吻に応えた。

「……ふ……」

共有する吐息が、やや白い。  
慣れた筈の絡め合い、染む、紅。  
甘露を、吸って切り、離れる。

「通年散らずの紅葉、だな」

映える火照り。間もなく迎える雪の如く、眩く輝く肌。  
夫として、遠慮なくすると脇を撫でれば、ふるっと震えた。

寒いのか、よし、と……僅かに潤う唇を奪い、更に暖を取らせる。  
舌を誘い直せば、ぽぽっと体温の上昇が面白い程露骨に感じ取れた。  
それでも、可愛く唇を啄み返してくれた宝が、荒く解いた途端身を翻し笑う。

「んもうっ！ 危うく浸っちゃうじゃないですか……  
続きは、その、部屋でゆっくり……」